

第5回乙川リバーフロント地区まちづくりデザイン会議レジュメ

日時 | 2017年2月27日(月) 13:30-15:30

場所 | 岡崎市役所東庁舎7階701号室

資料 | 1. デザイン会議の位置づけ 2. 乙川RF地区における都市戦略策定のスキーム

2-2. 都市戦略相関図 3. トレハンの提案まとめ

内容 | ①まちのトレジャーハンティング@岡崎の報告

②市民起点の動きを実現するためのすべきことの検討

1. はじめに【5分】

- ・主催者あいさつ
- ・デザイン会議の位置づけと進め方について [資料1 | デザイン会議の位置づけ](#)
- ・トレジャーハンティング@岡崎(以下、トレハン)参加者(サブユニットマスター)の会議参加について

(乙川リバーフロント地区デザイン会議設置要綱 第4条の2)

事務局は、メンバーの過半数が必要と認めるときは、会議に関係者の出席を求め、意見を聴くことができる。

2. 乙川RF地区における都市戦略策定のスキームについて

[資料2 | 都市戦略策定のスキーム](#) [資料2-2 | 都市戦略相関図](#)

- ・今年度、「デザイン会議」、「官民連携調整会議および分科会」、民間事業者の作戦会議「家守table」を経て、「都市戦略策定のスキーム」を構築
- ・[1] ライフスタイルデザイン、[2] 都市デザイン、[3] エリアマネジメントデザインを一体的に検討し、公民連携でまちづくりを進めていく
- ・トレハンは、エリアビジョン(このまちに、どんな人が住んで、どんな人が仕事して、どんな人が暮らすのか、どんな人が訪れて、どんな未来の日常があるのか)を考え、市民が起点となるまちづくりの提案を行う
- ・デザイン会議では、トレハンの成果を踏まえ、民間主導の公民連携で進める「都市戦略」について、具体的な動きをまとめ、提案する(→3/21Quruwa 戦略フォーラム)

3. 情報提供 | まちのトレジャーハンティング@岡崎の報告

(1) まちのトレジャーハンティング(以下、トレハン)開催概要

- ・【日時】2月18日(土)、19日(日)開催
- ・【参加者】定員40人の枠に82人が応募(半数以上が、リノベーションまちづくり、かわまちづくり、QFV等それまでのまちづくりの担い手)、年齢層は17歳~53歳、平均年齢35歳
- ・【エリアとメンバー構成】Quruwaを5つのエリア(A.セントラルアベニュー、B.旧東海道+六供町、C.りぶら周辺、D.伊賀川、E.乙川)に分け、以下のメンバーで各10名のグループを構成

- 専門家(ハンター:ユニットマスター)
- 地元まちづくり関係者(サブユニットマスター)
- 市担当者
- 公募市民

- ・【プログラム概要】参加者は、事前に岡崎市と乙川リバーフロント地区の課題と資源について学習し、2日間のフィールドワークとグループワークにより、エリアの課題や資源を発掘、都市戦略の基になる提案を作成。
- ・【成果報告会】2月19日(日)15:00-18:00 193名が参加(トレハン参加者・スタッフ含む)
- ・【提案まとめ】[資料3 | トレハン提案まとめ](#)
 - Youtubeで視聴可能→Youtubeで「まちのトレジャーハンティング@岡崎」で検索

4. 意見交換 | 市民起点の動きを実現していくためにすべきこと

■エリア

- ・木造密集市街地の「暮らし方」の価値を高める
- ・セントラルアベニューの活用・運営の仕組み
- ・りぶら周辺のエリアマネジメント
- ・徒歩と自転車を中心とした暮らしの実現
- ・乙川の日常的活用の促進

■テーマ

- ・都市交通機能
- ・駐車場再配置
- ・シェアサイクル
- ・ストリートデザイン
- ・循環型産業、健康な食産業、都市型産業の創出・誘致

5. まとめ

以上。

乙川リバーフロント地区まちづくりデザイン会議の位置づけ

1. デザイン会議について

- ・ デザイン会議は、H27 年度に策定された「乙川リバーフロント（RF）地区まちづくりデザイン基本構想」において、持続可能な都市経営を図るための戦略構築を担う専門家および関連部署の会議体としてその必要性が示され、H28 年度に設置されました。
- ・ 本会議は、メンバーの議論を聞いていただけるように公開としていますが、基本的には要望や意見を伺う場としては設定しておりません。
- ・ ただし、設置要綱（4 条 4）に則り、メンバーの過半数が必要であると認めるときに限り、広く意見を聴くことがあります。
- ・ 市民が主体的に活動していただける場合は、計画の進捗に応じて設けていきます。

2. 乙川リバーフロント地区デザイン会議設置要綱【抜粋】

（設置）

第 1 条 公民連携まちづくりによる持続可能な都市経営の実現に向け、乙川リバーフロント地区整備計画区域（以下「計画区域」という。）の公共空間（公園、河川、施設、道路、サインなど）及び民間空間における都市デザインの調整を図り、都市デザインの優れた魅力的なまちづくりを推進するため、乙川リバーフロント地区まちづくりデザイン会議（以下「会議」という。）を実施する。

（所掌事項）

第 2 条 会議の所掌事項は、次のとおりとする。

- (1) 公民連携まちづくりの仕組みづくりに関する事項
- (2) 計画区域の公共空間及び民間空間における都市デザインの調整に関する事項
- (3) デザインガイドラインの監修及び運用方針の検討に関する事項
- (4) その他都市デザインの推進に当たり必要な事項
- (5) 乙川リバーフロント推進会議との連携に関する事項
- (6) 乙川リバーフロント地区まちづくりデザイン官民連携調整会議との連携に関する事項

（組織）

第 3 条 会議は、メンバー 12 人以内をもって組織する。

2 会議のメンバーは、次の各号に掲げる者で構成する。

- (1) 岡崎市市政アドバイザー
- (2) 民間事業者
- (3) 岡崎市職員
- (4) ランドスケープ専門家

（会議）

第 4 条 会議は、必要に応じて事務局が随時招集する。

2 事務局は、メンバーの過半数が必要と認めるときは、会議に関係者の出席を求め、意見を聴くことができる。

- 3 事務局は、メンバーの過半数が必要と認めるときは、会議を非公開とすることができる。
- 4 事務局は、メンバーの過半数が市民から広く意見を聴く必要があると認めるときは、会議への出席を希望する市民をあらかじめ募集し、意見を聴くことができる。

3. 委員

(1) 岡崎市市政アドバイザー

清水義次 [都市再生プロデューサー]：リノベーションまちづくりプロデューサー

泉 英明 [都市計画プランナー]：かわまちづくりプロデューサー

藤村龍至 [建築家]：おとがわプロジェクトデザインコーディネーター

(2) 民間事業者

山田高広 [まちづくりプランナー]：地元家守会社

(3) 岡崎市職員

岡田晃典：企画財政部

畔柳久司：経済振興部

雑賀章友：経済振興部

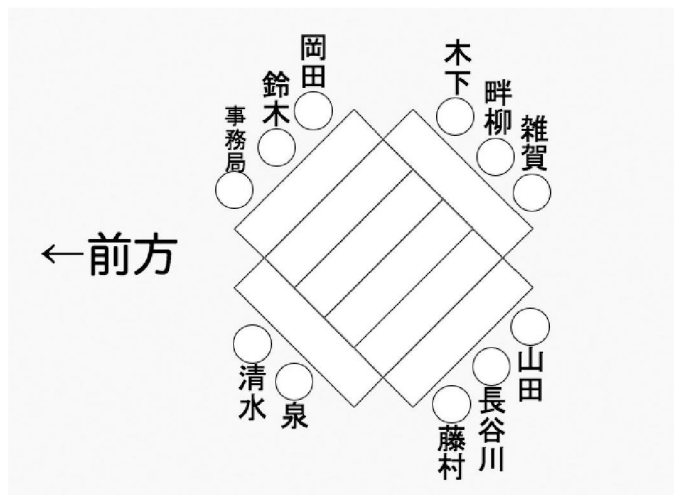
木下政樹：都市整備部

鈴木亨一郎：都市整備部

(4) ランドスケープ専門家

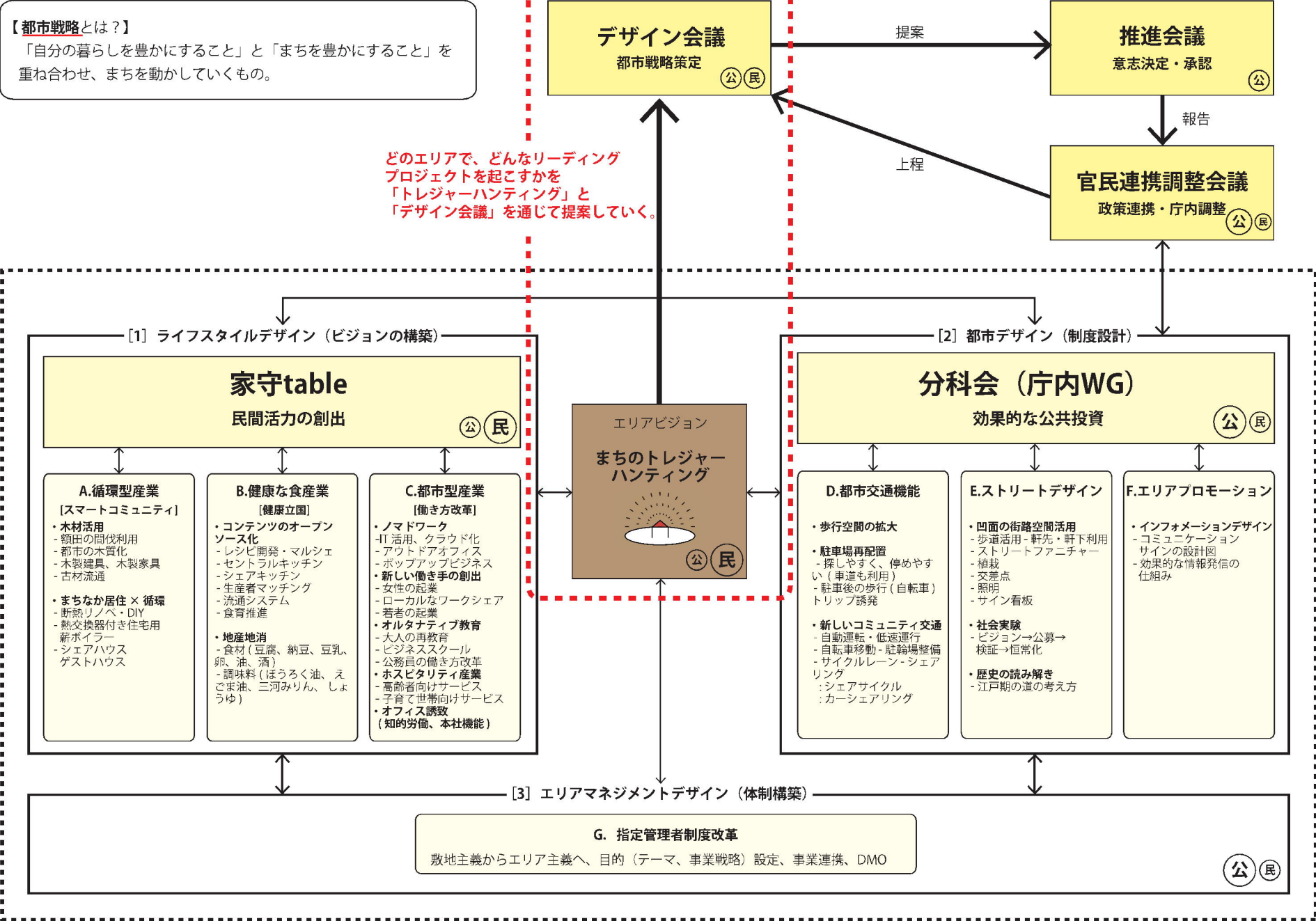
長谷川浩己 [ランドスケープデザイナー]：セントラルアベニュー設計者

4. 席次

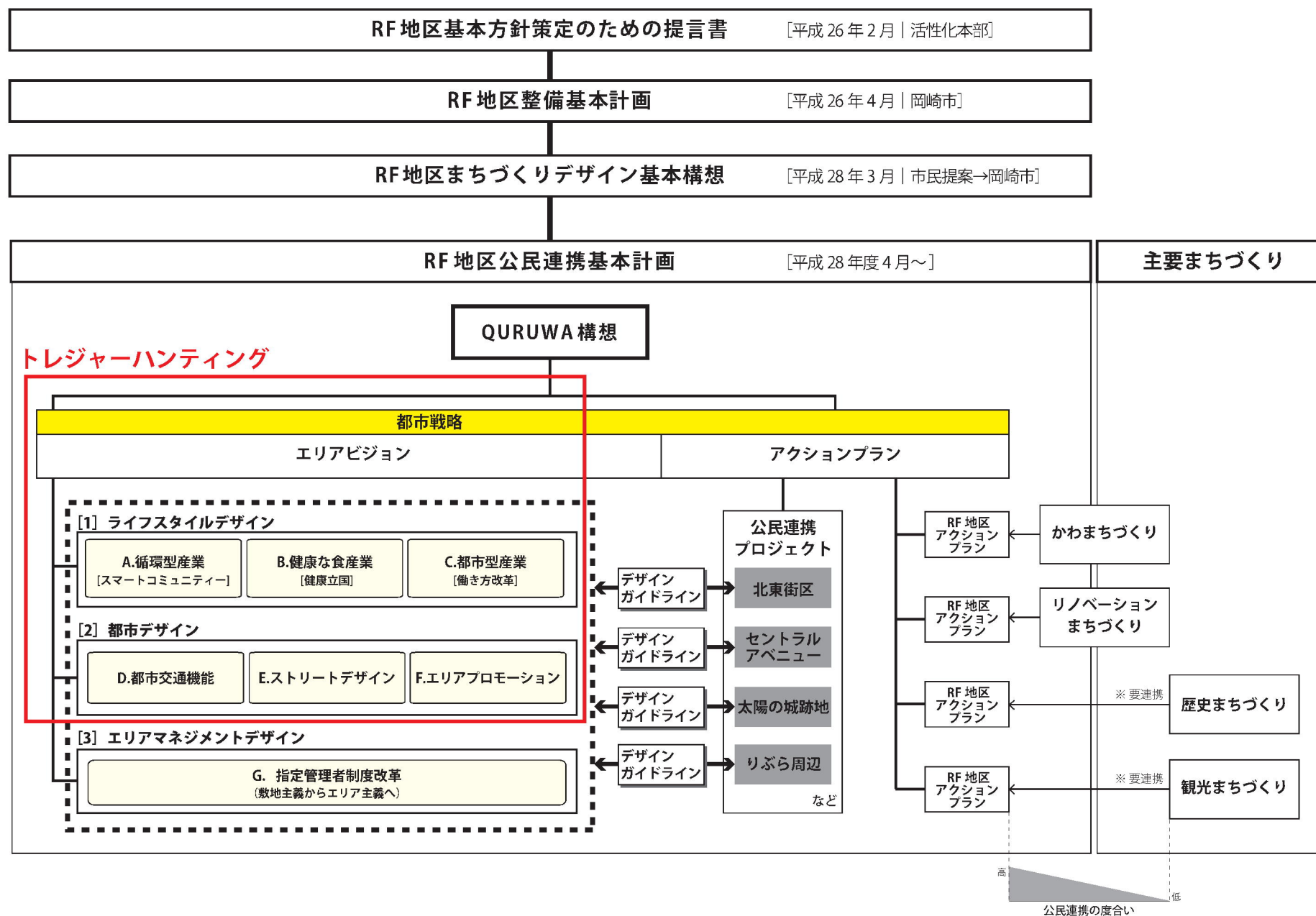


以上。

乙川RF地区における都市戦略策定のスキーム



おとがわプロジェクト | 乙川リバーフロント (RF) 地区における都市戦略関連図



トレジャーハンティング@岡崎 提案まとめ

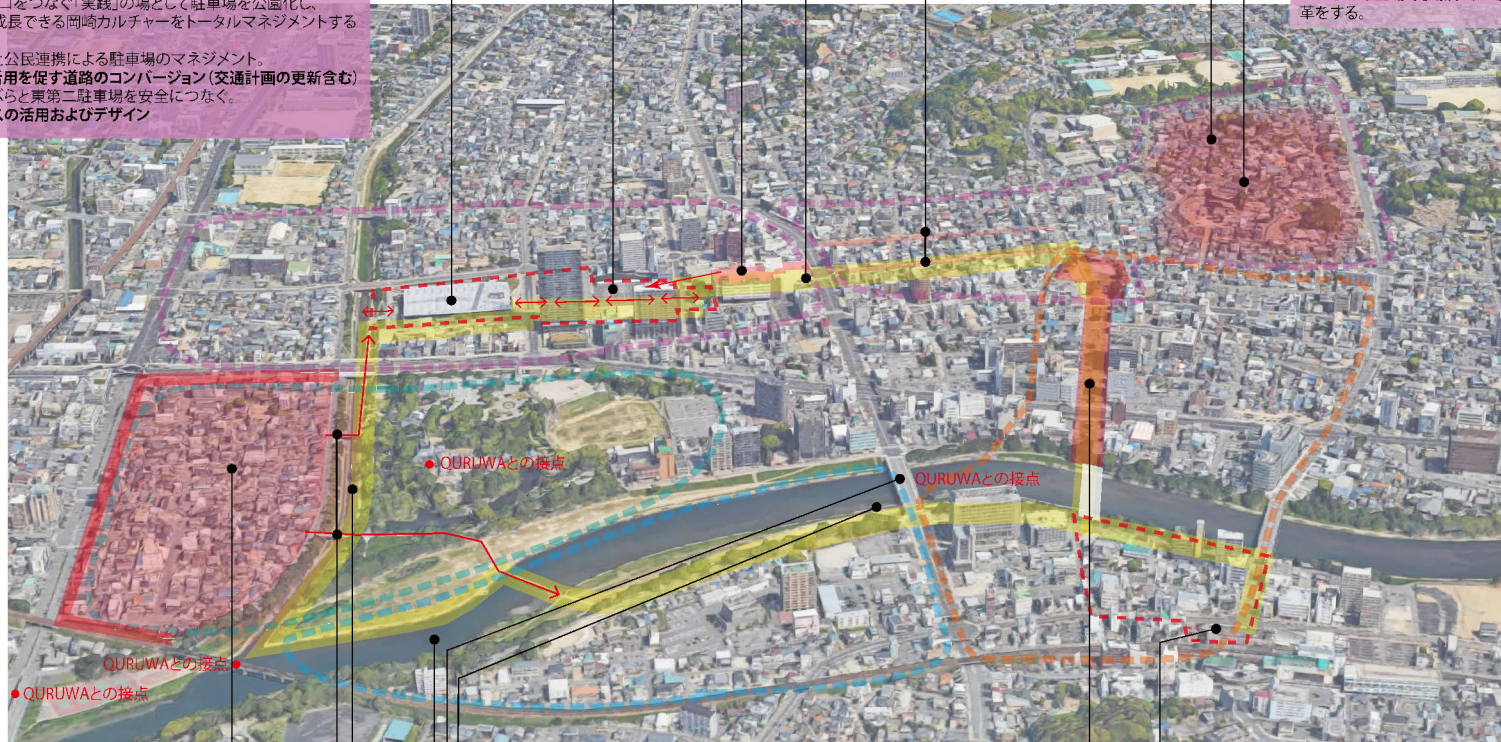
※以下はトレハン内で提案された内容で、市の方針や検討を示すものではありません。

資料3

X-1 発見、気づき 提案

- C-1** ・シビコは空き床も多く、元気がなくなってきているが、頑張っている個性的な店や最近できたアートノカルチャー拠点「Pocket」がある。
- C-2** ・シビコはあいちトリエンナーレで2回連続で使われた現代アートの聖地的な場所。いずれも展示会場となったシビコ屋上は開放的かつ心地の良い場所だが、普段は入れなくなっている。
- C-3** ・効率的にまちをつくるために大区画で開発されたにも関わらず、バラバラに管理されてかえって効率が悪くなっている。
- C-4** ・リぶらには人がたくさんいるのに、外には出ない。

・個別最適からエリア最適を図るエリアマネジメントの実現
「学び」のりふらと「生産」のシビコをつなぐ「実践」の場として駐車場を公園化し、子どもやアーティストが表現し成長できる岡崎カルチャーをトータルマネジメントする（「Parking」プロジェクト）。
民間も含めた駐車場の再配置と公民連携による駐車場のマネジメント。
・建物とオープンスペースの一体活用を促す道路のコンバージョン（交通計画の更新含む）
りふら東側の道路を廃止し、りふらと東第二駐車場を安全につなぐ。
・人の回遊を促すオープンスペースの活用およびデザイン



- D-1** ・国道（1号・248号）と川（伊賀川、乙川）に囲まれた「島」のようなエリア
- D-2** ・駅や商業・文化施設に近く、水辺の動線を使えば、車や道路に頼らず生活することができる。
- D-3** ・岡崎城や八丁味噌に近い立地、旧郷の歴史などが、エリアのアイデンティティや価値に結びついていない。伊賀川があることが一番のエリアの価値。

・『遊ぶように働く』という職住近接の暮らしをエリアブランディングする。
＝「シームレス・アイランド」
・車に頼らない、徒歩と自転車中心の暮らしを実現する。

- E-1** ・岡崎城と乙川が一望できる殿橋橋詰は、岡崎のよさを再確認できる場所であり、通過交通が多いため人目につきやすい場所でもある。
- E-2** ・Quruwaの接点となるバス通り、名鉄鉄橋、国道248号、岡崎公園には、多くの往来があるが、川の視認性が低い。
- E-3** ・乙川にはゴミが多い。川への関わりや関心がなく、汚れていることに気づいていない。
- E-4** ・乙川を日常的に使う市民は少ない。（トレハンの5時間のフィールドワークで川で出会った市民＝2組）

・車中心の生活の市民のマジョリティの日常との接点として、人の営みが滲み出す風景をつくりだす。
乙川における市民の未来の日常を描く＝「Otogawa People Collection」

- B-1** ・連尺通り・二七市通りにはリノベーションまちづくりにより、すでに変化が起こり始めている。
- B-2** ・戦災で焼け残った木密エリアは、車が通れない路地のヒューマンスケールな空間や生活がにじみ出している雰囲気や心地よさが、使われずに見捨てられたような空き家・空き地が点在している。
- B-3** ・空き家を再生し新しい息吹が生まれたリノベーション物件が示す、空き家と路地活用のポテンシャルの高さ。

・丘の上にある木密エリアの路地の雰囲気や車が入れないことに価値を感じる人々を集め、丘の上から下へ人の流れをつくる＝「水くくる」。
・住むか、住まないかという0か1かの選択ではなく、多様なまちへの参加の仕方があることを示し、自ら関わり方を発見し、まちに参加するきっかけをつくる＝「みんなの気持ちを1mm上げる」。
いろんな立場で参加することでまちを自分ごとにするという意識改革をする。

- A-1** ・駅からの動線が弱い。
- A-2** ・中央緑道、籠田公園にほとんど人がいない。
- A-3** ・整備計画は先行しているが、使われているイメージが見えない。

・まちの姿や状況を変えていくために、市民の気持ちのスイッチを入れる
イオン・JR岡崎の新市街の「消費」の場に対して、旧市街＝RF地区を「クリエイティブ」の場と位置づけ、それを一番表現しやすい公園やオープンスペースで、やりたいことをやっている姿＝楽しい風景を生み出す。
それがまちのアイデンティティとなり、わざわざ行きたいくなる目的地となる。
・「自分のため、かつみんなのための空間」として、市民が主体となってつくり、運営する新しい公共空間の仕組みをつくる